自主事業

経済的困難を抱えるこどもの学び支援

病気・障がいを抱えるこどもの学び支援

被災したこどもの学びや育ちの支援

こどもの安心・安全を守る活動

よりよい社会づくりにつながる学び支援

自主事業は、
こどもの学び支援のために
ベネッセこども基金が
さまざまな協業先とともに
企画・実施する事業です。

Core Theme

支援の根幹となる「子どもの権利」を守るために
必要不可欠な「ユースワーク」の研究・実践を本格始動

ユースワークとは、こども・若者が安心して過ごせる居場所の中で、自分のやりたいことに挑戦したり、地域の活動に社会の一員として参加できるよう支える営みです。こどもから若者へと移行していく過程で、10～30代くらいの若者の居場所として機能するのが「ユースセンター」です。自分らしく成長し、社会とつながっていく中で、自分の意思をもち、それを表現しながら周囲と協働する力を育んでいきます。若者一人ひとりが社会とのつながりを実感し、自ら未来をつくる主体となっていくことを支える「ユースワーク」について、研究・実践を本格的にスタートしました。

国内外でモデル性のある事例を現地視察 ⇒ **報告会での学びと対話** ⇒ **ユースワークにかかわる人たちがつながり、次の実践へ**

北欧で国内のこども支援団体と現地視察

広く国内の事例を視察

北欧視察の報告会。学びを深め、人的ネットワークも構築

イギリスのユースワーカーから、大切にしている価値観を学びます

視察の様子はnote記事でご覧いただけます。

こども・若者が安心して過ごし、自らの意思でかかわっていける社会へ

Special Interview

ストックホルム大学などで学び、欧州における若者の社会参画や若者政策、ユースワークを研究。日々の研究内容を発信する個人ブログも人気。著書多数。

日本福祉大学講師　**両角達平先生**

こども・若者が自由に挑戦できるよう、信頼して裁量を渡す社会に

北欧ユースワークの専門家で、北欧視察のコーディネーターでもある両角達平さんに、視察の意義や成果、今後への期待についてお話を伺いました。

私がユースワーク研究を始めた原点は、学生時代の経験にあります。中学・高校時代には音楽スタジオや自習室が充実した地元の施設でよく過ごしていましたが、大学で地元を離れてみて、そうした居場所は当たり前にあるものではないのだと気づきました。また大学生という立場で世の中をとらえたときに、社会との距離感を大きく感じました。**自分の声は本当に届いているのか？ 若者の居場所はあるのか？** と。

大学3年で初めてスウェーデンに行き、同世代から「民主主義」という言葉が頻繁に出ることに驚きました。初めはピンとこなくて、**民主主義ってどういうことなんだろう？ 本当の意味で理解したい**、という気持ちが湧き上がってきました。

今回の北欧ユースワーク視察では、日本のこども支援の最前線で活動されている方たちといっしょに、スウェーデン・フィンランドの最新の現場を見て、国内のユースセンターの在り方についてヒントを得ることができました。スウェーデンへの留学経験から、やはり現地の空気感から得られるものは大きいと感じていて、それを皆さんといっしょに体験できたのがよかったですね。**実際にユースワーカーの方のお話を見聞きし、体験することで、語る言葉にも実感が伴っていきます。**

北欧には、日本にまだない考え方が満ちていて、それらを取り入れるには**新しい言葉や理念、肌で感じる身体感覚が必要**です。現地で視察と振り返りを行うたびに、これからの日本のユースワークを考えるうえでの問いがシャープになっていった。自分自身も、公共のあそび場（パークレク）やそこで活躍する若者リーダーの存在、フィンランドとスウェーデンの違いなど、新たな発見も数多くありました。

視察にはライターさんも同行し、研究者とはまた違った視点で取材をしてくださいました。現地の様子やユースワーカーの生の声、利用者のリアルな姿から、サイドストーリー的な要素まで記事にしていただけました。ユースワークについて皆さんに関心をもっていただき、広めていくのにとても有効で、発信力のあるベネッセこども基金さんが主催する意義の一つだと思います。今後も国内外のユースワークについて発信を続けていってほしいです。

帰国後の報告会は4回のオンライン発表のあと、最終回として対面・オンラインのハイブリッド形式で交流会を行いました。とくに対面の交流会では、**ユースワークにかかわる人たちが一堂に会し、つながりができる場になりました。**

日本のユースワークは、スタートラインに立ったところです。国としてももっとユースワークにリソースを割いてほしい。せっかく現場で先進的な取り組みをしていても、社会や国に広がっていかないのはもったいないことです。ベネッセこども基金さんには**中間支援団体として、現場と国・自治体をつなげる役割**を期待しています。まだ知られていない活動を発掘し、社会とつなげていってほしい。また、「若者自身の活動」を直接支援するしくみがあってもいいと思います。若者が自由にやりたいことに挑戦できるためには、資源と裁量が必要。決定権や予算もなく「好きなことをやりなさい」と言っても、できません。自由に生きる環境を整備するために、**若者への信頼の証として資源や裁量を渡し、任せていくことが大切**だと思います。

経済的困難を抱えるこどもの学び支援

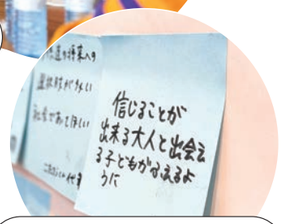
さまざまな事情から経済的に困難な状況にあるこどもに対し、学びや体験の機会提供、困りごとの解消などの支援を行います。

Pick Up

児童養護施設の高校生がカナダでユースと交流。視野を広げ、学びや自己理解を深めるきっかけに

社会的養護の下で育つこどもは、十分な学びや体験の機会を得られず、進学や将来への希望を伝える経験がもてない場合があります。
児童養護施設の高校生が人権先進国であるカナダを訪れる10日間のスタディツアーは、2024年に開始し今回で2年目。現地ユースとの交流、グループワークやプレゼンテーションで自分の意見を表明する体験をしました。カナダのユースとの対話を通じて、自分の経験や考えは唯一無二であること、それを伝える重要性や自己決定・意見表明の権利への気づきがありました。帰国後の事後報告会ではカナダで得たことの理解を深めるセッションで想いを共有。発信力や問いを立てて探求する力、自分の人生を主体的に描き、挑戦する力を育みました。

現地のユースと交流し、日本と異なる考えにも触れました



事後報告会では一人ずつ学んだことを発表し、想いを言葉にしました

※特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、社会起業家白井智子氏、NPO法人チャイボラ、現地コーディネーター菊池幸工氏との協業で実現しました。

活動の様子はぺネッセこども基金のサイトからご覧いただけます。

Pick Up

外国ルーツのこどもの学びを支える キャラバンを実施。全国4か所で知見を交換し、横のつながりづくり

日本国内で暮らす、外国にルーツのあるこどもたち。言葉や文化、生活習慣の壁もあり、学びや体験の支援も全国的に必要性が高まっています。一方で、活動は地域ごとなど個々になりがちに。支援団体同士がつながりをもち、互いに知見交換したいという現場の声を受け、つながりを強める施策に力を入れました。2024～25年度にかけて香川・北海道・大阪・福井で支援団体が集うキャラバンを開催。パネルディスカッションやグループワーク、先進的な取り組みをする学校の見学といったプログラムで、当事者がもつ困難や希望、仕事や自己実現に向けた将来の描き方などを浮き彫りにしました。支援者同士が学び合い、ネットワーク形成の土台をつくることができました。

※YSC Global Schoolとの協業で実現しました。

活動の様子はぺネッセこども基金のサイトからご覧いただけます。

日本の生活で感じたことや体験を、ラジオ形式でトーク（福井）

将来の夢や仕事についてのパネルディスカッション（大阪）

よりよい社会づくりにつながる学び支援

こどもたちが自分らしく未来の選択肢を広げていける社会の実現を目指し、インクルーシブ教育やDE&Iを推進しています。

Pick Up

ICTを活用し、視覚障がいのこどもたちの可能性を広げる学びの場づくりを

視覚障がいを抱えるこどもたちは体験や他者と協働しながら自己表現をするといった学びの機会が限られています。加えて、進路やキャリアなど将来を描くうえでも十分な情報やつながりも限られています。これらの課題解決に向けた2つの取り組みをご紹介します。

こどもたちの実際の作品をアバターとして鑑賞

メタバース空間での作品展を開催。自分を表現し、議論する機会をつくる

北海道の盲・視覚支援学校4校が協力し、メタバース（コンピュータ上に構築された三次元の仮想空間）でのアート作品展を開催。音によるナビゲーションや見やすい画面配色など、弱視や全盲のこどもがひとりで操作できるよう工夫しました。自分の気持ちやアイデアを表現した作品に対し、ほかのこどもから意見や感想をもらう協働的な学びの中で、伝える力を磨くことを目指しました。

※一般財団法人ニューメディア開発協会との協業で実現しました。

多様な人々が活躍できる仕事や働き方への理解が深まりました

視覚障がいのある学生向けお仕事説明会・プログラム
- 多様な業界より、5社の企業から話を聞く
  ～どんな仕事をしているの？社風は？～
- 視覚障がいのある5人の先輩社会人の体験談を聞く
  ～夢やキャリアの歩み、働くうえでの工夫～
- 質疑応答
  ～仕事と人生のリアルを語る～

多業種の社会人とオンラインで交流し、仕事や進学のイメージを描く

日ごろから視覚障がいのあるこどものための調査やワークショップを実践している団体の知見を生かし、こどもが将来を描くための場づくりも実施。視覚障がいのある高校生・大学生へのお仕事説明会では、会社員や経営者など多様な経歴の視覚障がい当事者の先輩方が仕事の様子や工夫、これまでのキャリアパスについてご講演。質疑応答でもリアルな体験談を聞き、将来の夢や選択肢を広げるきっかけの一つとなりました。

※リファインプロジェクトとの協業で実現しました。

活動の様子はこちらからご覧いただけます。

Pick Up

中高生による当事者研究を支援する「DE&I賞」でマイノリティ性の社会モデルを推進。研究者どうしの交流も広がる

かつて障がいは「本人の体の中にあるもの」とされ、個人の努力で社会に合わせる「医学モデル」の考え方が中心でした。現在は「障がいはアンフェアな社会環境の中にある」とし、誰もが参加できる社会づくりを目指す「社会モデル」が大切だといわれています。しかしまだまだ実現されているとはいえません。

そこで、「ベネッセこども基金DE&I（ダイバーシティ＆インクルージョン）賞」を設置。自分を取り巻く環境でマイノリティだと感じる違和感や名もなき特性について探究する「当事者研究」を行う中高生を支援しました。

研究費助成のほか、当事者研究の第一人者である東京大学先端科学技術研究センター熊谷晋一郎先生をはじめ、研究者の先生方にメンターとして半年間研究プロセスをサポートしていただきました。

※株式会社リバネスとの協業で実現しました。

ベネッセこども基金事務局長より、「ベネッセこども基金DE&I賞」を授与

ベネッセこども基金DE&I賞・研究対象分野
自分自身の特性やマイノリティ性に着目したあらゆる開発や研究

2025年度の研究テーマ例
- 「光と香りで“心を照らす花”の製作～4感で感じる癒やしの仕組とその可能性～」（高校2年生）
- SNS「病み垢」依存から「リスクを冒して会ったことのない人同士の集団で集まる」行動に至るまでの路線に乗った中高生のとらえられ方はどうしたら変わるか（高校3年生）　など

オンライン参加の熊谷先生とともに

2025年度は特別にアルムナイ会（同窓会）を実施。この3年間の受賞者が集まり交流

アルムナイ会では、互いに研究内容やその後の活動を共有。一人ひとりはマイノリティでも、探究し、発信し、何かを変えようとする人たちが集まれば大きな力になる。そんなエネルギーにあふれた時間となりました。

東京大学先端科学技術研究センター教授
熊谷晋一郎先生

東京大学先端科学技術研究センター教授、小児科医。専門は小児科学、当事者研究。今回の研究で半年間研究プロセスをサポートいただきました。

マイノリティ性や障がいのある当事者が研究をすることには、大きな意義があります。障がいのない専門家だけで研究をすると、当事者が求めるものとずれてしまうことがある。当事者の経験やニーズ、苦しみを表現するための言葉さえ存在しない場合もあります。あなたの苦しみは決して、「気のせい」ではない。新しい言葉をつくり、いろいろな人と一緒に、時に衝突もしながら快適な社会に変えていく。当事者研究は、まさに社会モデルを体現したものなのです。

活動の様子はベネッセこども基金のサイトからご覧いただけます。

病気・障がいを抱えるこどもの学び支援

重い病気や障がいを抱えるこどもの学びや体験の機会を創出し、成長を支援する事業を行っています。

Pick Up

病気療養中のこどもへの支援体制について、認知や理解を広める

病気により長期療養を必要とするこどもたちは、勉強や学校生活に多くの不安や悩みを抱えています。各地域で相談や情報提供、関係機関との調整を行うのが「小児慢性特定疾病児童等自立支援事業（小慢事業）」ですが、認知度は低く、地域ごとの「自立支援員」もあまり知られていません。そこで、支援の情報をまとめたハンドブックの配布を今年も継続して実施。さらに2025年度は専門家らによるイベント「病気療養する子どもとその家族の支えになるには？」を開催しました。対面とオンラインで、全国から行政・教育・医療・保護者などさまざまな立場の方が参加。現状を知り、できる支援について考える場となりました。

※認定NPO法人ポケットサポートとの協業で実現しました。

ライフステージに応じてどんな支援が受けられるのか等をわかりやすく紹介している冊子は継続して配布中。自治体版もあります。

活動の様子はベネッセこども基金のサイトからご覧いただけます。

こどもの安心・安全を守る活動

こどもの生活でもっとも大切な「安全」を守るため、身の回りの防犯・インターネット安全・防災などの観点で教育事業を行っています。

より多くの方にご活用いただくため、25年度よりデジタル教材としてもご活用いただいています

Pick Up

教育プログラムを、学校などへ無償提供

こどもの安心・安全な環境づくりのための支援プログラムの無償提供を、財団設立当初から実施しています。ネット利用の低年齢化により、学校現場からのネットリテラシー教育へのニーズが高まっています。

※防犯分野は市民防犯インストラクターの武田信彦さんに企画・監修いただいています。

防災
保育園・幼稚園向け

防災教育紙芝居
「じしんのときのおやくそく」
※配布は終了しています。

防犯
小学校低学年向け

子どもの安全・安心ハンドブックと安全教室実施パッケージ

インターネット
小学校中学年・高学年向け

初めてのスマホ安心ガイドブックと安全教室実施パッケージ

シリーズ累計のべ約134万部※

※2026年6月時点